

企画展 2 発掘調査で明らかになった遺跡展 1

土佐市 上ノ村遺跡



かみのむら
上ノ村遺跡は、高知県第二の大河仁淀川が太平洋に注ぐ河口から約2km遡った波介川との合流する川辺に位置しています。

発掘調査では縄文時代から近現代までの他地域との交流や交易を示す遺物が多く出土しています。上ノ村遺跡は目のまえに広がる太平洋を介した海上交易により得られた遠隔地の物資や情報を仁淀川や波介川を利用し内陸部に運ぶ重要な拠点であったと考えられます。まさに海上の高速道路のインターチェンジの役割を果たしていた、人・物・文化の玄関口でした。

今回の発掘調査で、この地域では縄文時代以来現在に至るまで、人々の生活が絶えることが無かったことがわかりました。地域の人々は河川と密接に結びついた生活を営んでいましたが、河川は「めぐみ」をもたらすだけでなく、洪水や津波などの災害、試練を幾度となく与えたと考えられます。縄文時代以来連綿と続く遺跡は、その試練を乗り越えてきた人々のたくましさや地域への思いや行いの痕跡といえます。今回の展示で、それらを感じていただければ幸いです。

発掘調査について

上ノ村遺跡は、国土交通省によって計画された「波介川河口導流事業」に伴うものとして行われました。平成16年から平成21年度まで6年間の発掘調査では、縄文時代から近現代の戦争遺構に至る多くの遺構や遺物を確認することができました。また、県道を挟んだ西側には北ノ丸遺跡が所在しており、上ノ村遺跡とも関連するものとみられ、今回の展示では合わせて展示及び解説をしています。

1. 縄文時代の遺構と遺物

縄文時代の遺構・遺物は中期～晩期の遺物が出土しており、特に晩期の遺物は城山の山麓部から多く出土しました。住居跡の確認はできませんでしたが、斜面をテラス状に成形した部分からは土器や石器が多く出土し、魚やイノシシ、シカなどの骨片も確認することができました。この縄文時代晩期前



縄文土器出土状況

葉(約3300年前)の土器は「上ノ村式」と命名され、高知県で不明であったこの時期の土器の状況を明らかにするものとなりました。



上ノ村式土器 深鉢

キーワードは「交流・交易」

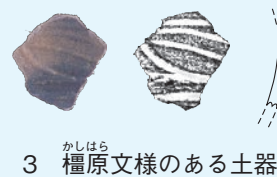
- ・近畿地方の「^{かしはら}檀原文様」が付く土器は高知県で初めての出土です。
- ・九州産と考えられるクロム^{しろらんも}白雲母製玉類が出土しています。
- ・石鏃は香川県産サヌカイトで作られています。



1 クロム^{しろらんも}白雲母製玉類



2 サヌカイトで製作された石鏃



3 ^{かしはら}檀原文様のある土器



交易図 (地図番号と写真番号は同じ)

2. 弥生時代の遺構と遺物

弥生時代では、中期末(約2000年前)の集落跡を確認しました。円形の竪穴建物跡や溝状の土坑などの遺構から土器をはじめ石器など多くの遺物が出土し、高知県西部地域で多く見られる在地系の土器以外に、凹線文土器が仁淀川流域で初めてまとまって出土しました。また、建物跡からは鉄製品や鉄滓^{てつさい}を多く確認できました。砥石やハンマーとして使った叩石が出土しており、鉄製品の加工を行っていた可能性も考えられます。

キーワードは「交流・交易・鉄」

- ・凹線文土器は瀬戸内地域に特徴的な土器で、仁淀川より西側地域で出土した例は少ないです。
- ・鉄製品や鉄滓^{てつさい}が住居跡から多量に出土し、鍛冶^{かじ}関連の遺構の可能性が考えられます。
- ・鉄素材はすべて流通・交易によってもたらされたと考えられます。



円形竪穴建物跡遺物出土状況



おうせんもん
左 凹線文土器 壺
くび
頸に凹んだ線(凹線)がある瀬戸内地域の影響の強い土器です。



右 在地の壺
過剰とも思える程の装飾が表面に施された高知県西部地域の特徴を持つ壺です。

3. 古墳時代の遺構と遺物

今から約1700年前～1400年前の古墳時代の遺構・遺物の多くは、北ノ丸遺跡から検出しました。北ノ丸遺跡では木器溜りを検出し、木器や部材と考えられる木材が多く出土しています。上ノ村遺跡では、古墳時代の可能性が高い遺構(SX1)を検出しています。SX1は小さな溝で囲まれた一辺約2mの正方形の建物で「ホコラ」の可能性も考えられましたが、その性格を特定することはできませんでした。

キーワードは「有力者・重要な地域」

- ・ 四国で2例目の琴が出土しました。音を大きくする共鳴箱の付いたものと考えられ、「まつり」に使った可能性が考えられます。
- ・ 衣笠きぬがさの一部が出土。衣笠は「高貴な人」に差し掛ける大きな日傘で、儀式等の時に使われ、権威を表すものです。
- ・ 田下駄たげたが16点出土しており、低湿地を利用した農業が盛んに行われていたと考えられます。

琴



琴復元図

音を響かせる共鳴箱が下に付いていたと考えられます。

須恵器 横瓶よこべ

酒などの液体を入れた容器



田下駄たげた

鼻緒を通す穴が3ヶ所みられます。



北ノ丸遺跡 木器出土状況

4. 古代の遺構と遺物

古代は奈良時代～平安時代(約1300年前～約800年前)にあたります。古代の遺構・遺物は城山の南側を中心に検出しました。奈良時代の遺物も少量出土していますが、多くは平安時代のもので、建物跡や井戸跡も確認できました。掘立柱建物跡の柱穴は方形で規模が大きいいため、民家のものではなく、役所的な性格を持つ建物の可能性が高いと考えられます。

キーワードは「役所・交流・交易」

- ・ 緑釉陶器、灰釉陶器や黒色土器など役所で使われたと考えられる土器が多く出土しています。
- ・ 緑釉陶器は京都産、近江産、灰釉陶器は東海地方産で、黒色土器は近畿地方で作られました。



緑釉陶器 椀 京都産



緑釉陶器 椀 京都産



緑釉陶器 耳皿 京都産



緑釉陶器 椀 京都産



黒色土器 椀 近畿地方産



黒色土器 椀 近畿地方産



掘立柱建物跡完掘状況

5. 中世の遺構と遺物

中世は鎌倉、室町時代にあたります。城(新居城跡)山麓の最も川辺に近い所で鎌倉時代を中心とする13～14世紀の遺構や多くの遺物を検出しました。室町時代になると集落の範囲は拡大し、溝で囲まれた屋敷跡などの主に15世紀代の遺構や遺物を確認できました。

新居城跡は中世に築かれた山城で上ノ村遺跡全体を見渡す位置に有ります。残存状況が不良であったため詳細な状況はわかりませんが、城の山下でV字状の壕と考えられる溝跡を確認しており、これらから集落を見守る城として機能していたと考えられます。また、仁淀川に面した丘陵状に立地していることから、仁淀川の水運や「渡し」を見張る役割を果たしていた可能性が考えられます。

キーワードは「拡大する交流・交易・津」

- ・在地以外で生産された土器が多く出土しており、活発な交易が行われていた事が分かります。
- ・海上や河川を使い遠方から来た物資を内陸部へ運ぶ拠点、みなと＝「津」であったと考えられます。

3 東播系須恵器 片口鉢 兵庫県産



2 備前焼 擂鉢 岡山県産



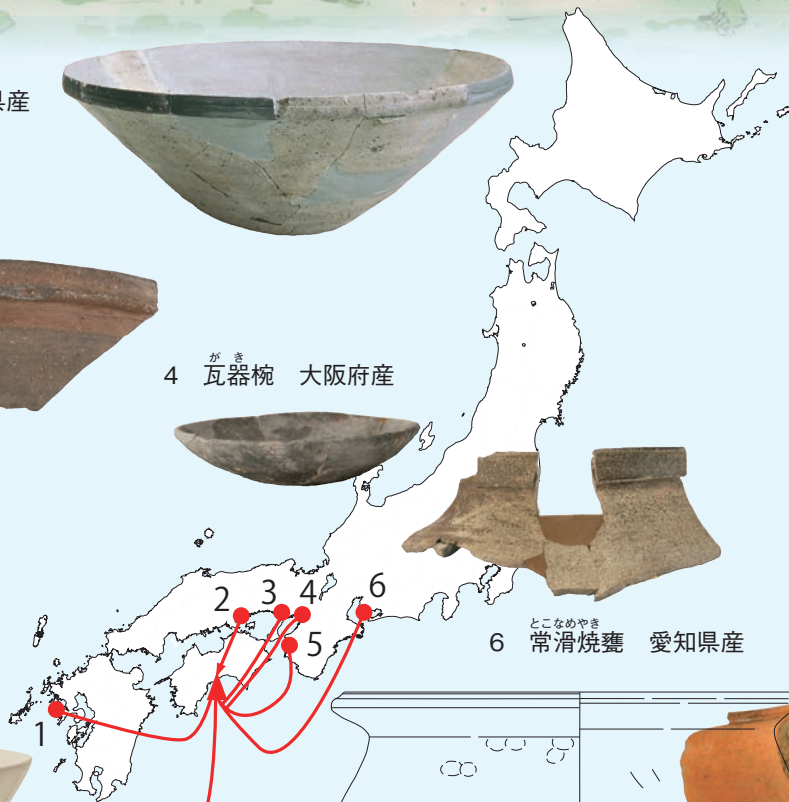
4 瓦器椀 大阪府産



1 石鍋 長崎県産



7 青磁碗 中国産



6 常滑焼甕 愛知県産



5 紀伊型甕 和歌山県産



7 白磁碗 中国産

土器の生産地と交易図 (地図番号と写真番号は同じ)

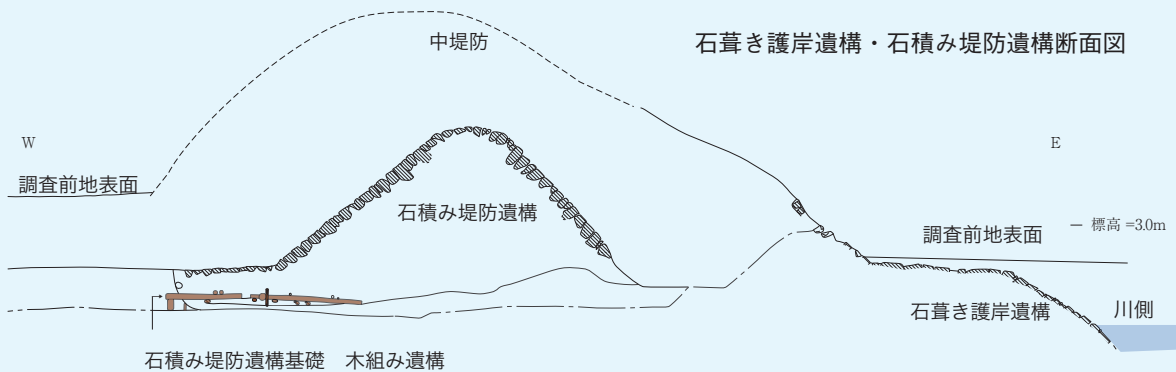
6. 近世～現代の遺構と遺物

現代の堤防の内側には、地元で「中堤防」と呼ばれる旧土堤がありましたが、その内部を調査した結果、「中堤防」より一段階古い高さ約4.2mの石積みの堤防があらわれました。この石積みの堤防遺構の最大の特徴は、堤防の上流端の地中に木組みの基礎を構築して、安定を高めていることです。このような木組みを基礎とした堤防遺構は全国でも初めての例で、わが国の伝統的土木技術についての重要な資料となります。

さらに、この堤防遺構の下から、河岸を石葺きした護岸遺構が出土しました。江戸時代前半に造られたとみられるこの護岸遺構の特徴は、長い「平場」や突堤状の付属施設（猿尾部分）です。この護岸遺構には豊臣秀吉による京都の宇治川の「太閤堤」と似た要素があり、上記の築造年代とも齟齬がありません。江戸時代の姿をとどめる護岸遺構の発見例自体が全国的にも少なく、また、平場や突堤状の付属物も珍しいもので、注目を集めています。

キーワードは「川の利用と治水への思い」

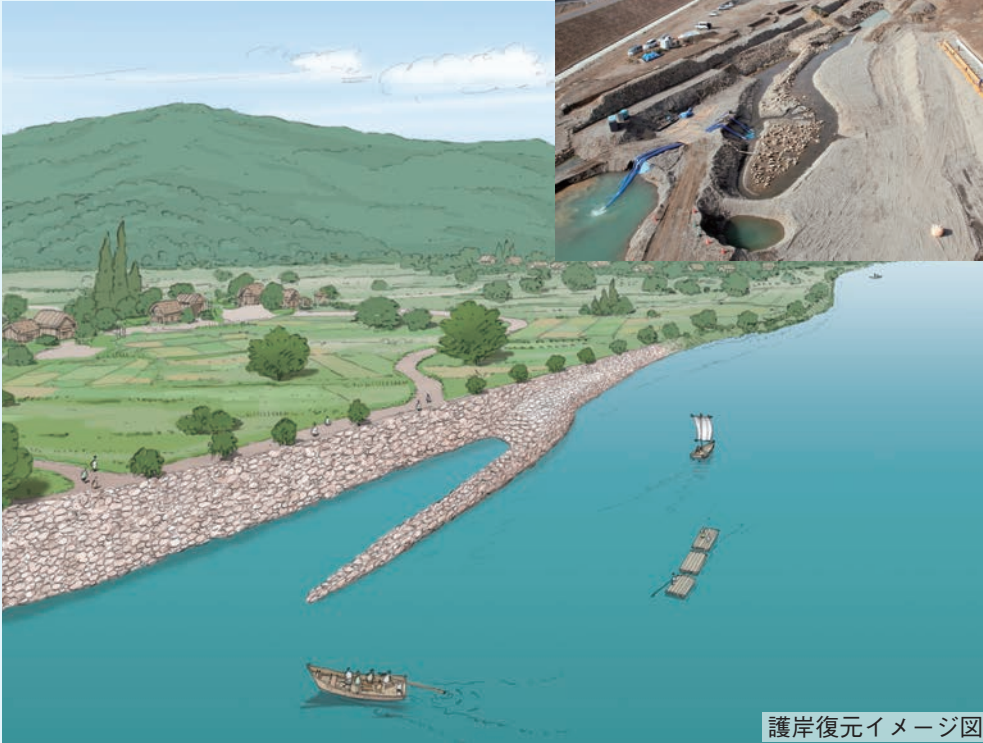
- ・石を多量に使った大規模な護岸で、船溜まり場状部分を設け、改修も行われるなど仁淀川河口の重要な施設であったことがうかがえます。
- ・石葺き護岸→石積み堤防→中堤防→現堤防→新堤防と続く、河川の氾濫から地域や暮らしを守るためのねばり強い努力と工夫の一端が明らかとなりました。



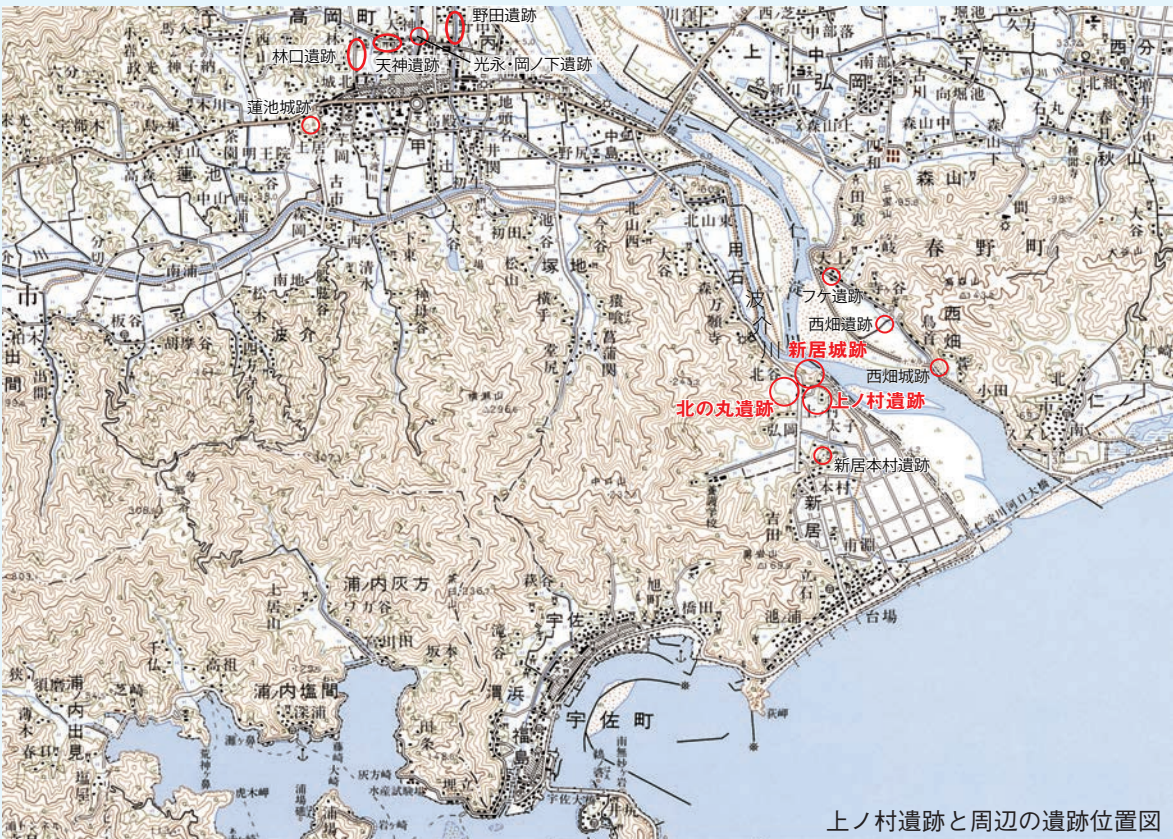
堤防遺構基礎 木組み遺構



石葺き護岸遺構検出状況



護岸復元イメージ図



上ノ村遺跡と周辺の遺跡位置図

3000年前	2700年前	2000年前	1500年前	1000年前	500年前	現代
旧石器時代	縄文時代	弥生時代	古墳時代	飛鳥時代	奈良時代	平安時代
						鎌倉時代
						室町時代
						江戸時代
						安土・桃山時代
						大正時代